

深イ～話！

No.99

—「みやざき中央新聞」体の6割を火傷して—

(ジェイ・コスモ(株)代表取締役 大島修治)

平成8年7月、私が48歳の時でした。

その日、私は会社の役員室にいました。そこに暴漢がいきなり入ってきて私にガソリンを掛け、発煙筒を投げつけました。

火ダルマになりながら私は無我夢中で3階から1階へ駆け降りました。そこにいた社員さんが消火器で火を消してくれました。

体の6割を火傷しました。朦朧とした意識の中、病院で「あなたはもうダメです」と宣告されたのを覚えています。

やがて目が覚めました。

「俺はまだ生きている」と思いました。それからが地獄の日々でした。

包帯を解き、壊疽しかかった皮膚を毎日洗い流しました。この世のものとは思えない痛みで、大声でわめき散らしました。

やがて肉体再建が始まり、皮膚移植を18回行いました。危篤状態が5回ありましたが、奇跡的に乗り越えました。

ある日、先生から「どうも壊疽がひどいので、右腕を切断します」と言われました。

その言葉を聞いて私は生きる気力を失いました。

「右腕を失うのか。経営者としては再起できないな。もう死のう」、そう考えるようになりました。

目の前にある注射器を見て、「あれを飲んだら死ねるだろうか」と手を伸ばして止められたり、暴れ回らないように縛られた紐で自分の首を絞めようかとも思いました。でも、火傷でただれた手では紐も握れませんでした。

「病院の中では死ねない。もう出るしかない」と思い、隙を見てベッドから抜け出しました。

歩けずに冷たい床の上を這うように進んだので、治りかけた皮膚がひどい状態になりました。でも、結局連れ戻されてしまいました。

悔しい、眠れない、痛い、かゆい、死にたい。まるで地獄のような毎日でした。

そんな中、当時85歳の父親はほとんど家に帰らず、夜は私がいるICUの外のソファで毛布にくるまって寝ていたそうです。

しかも気丈な父は、硬い杖を木刀代わりにしながら「今度変な奴が来たら、父ちゃんがこれで守ってやる」と言っていたそうです。

74歳の母親は私に言いました。

「おまえがどんな体になっても、母ちゃんはまだ一人子どもを産んだと思って何でもする。だから頑張るんだよ」

そんな両親の言葉を聞きながら、

「父ちゃん、母ちゃん、心配かけてごめんね。なんとか俺、頑張ってみるわ！」と、私はもう一度生きる決心をしました。



人間って不思議です。生きようと思うと、次の日からどんどん元気になっていくんですね。

その日から、「地獄の闘病生活」から「生きようとする闘病生活」に変わりました。栄養のあるものを必死で食べるようになりました。

そんな私の様子を見て、先生は「右腕を切るのはもう少し待ちましょう」と言いました。

移植を繰り返すうちに少しずつ良くなっていきましたが、移植できる皮膚がとうとうなくなってきました。

そんなある日、家内が言いました。

「子どもたちが皮膚を移植してくれるそうですよ」

私はすぐに「子どもたちにそんなことさせるな」と言いましたが、子どもたちの意志は変わりませんでした。

手術が終わり、包帯に巻かれた右腕を見て思いました。

「なくなると諦めていたのに、息子たちのおかげで私には右腕がある」

私は右腕を見るたび、「息子たちといつも一緒だ」と思えて本当に勇気が湧いてきます。ありがたい感謝の気持ちでいっぱいです。